

子どもの世界をとらえる影

第1回

このコーナーでは、教科書に掲載されている生徒作品を取り上げ、奥村高明先生に、その作品の見方や考え方(※1)などを紹介いただきます。

「描かれた事実」と「解釈」に分けて見る

この絵には、山形県の「第50回記念県子ども絵画展覧会(子ども県展)」(2008年)の審査で出会った。何か引っかかった。なぜだろう? その引っかかりを解明するために、いつも順序良く絵の部分を見ていくことにしている。その際、「描かれた事実」と見る側の「解釈」を丁寧に分ける。「描かれた事実」を根拠にすることは「描いた当人の事実」を尊重することになるし、見る側の好みや審美眼を根拠にした「上から目線」や大人の「思い込み」(例えば児童画らしさ!)を防ぐことにもつながるからだ。子どもの絵を見るということは、子どもの身と自分の身を重ねる行為である。この作業をしていると、しだいにこの子の視線に自分の視線が重なっていくような気持ちになる。

結果的に、私はこの絵から、右ページの1~4のように考え、この絵は、この子の「身近な風景からの発見」だと判断した。

「引っかかり」の理由

審査のときは毎回そうだが、選ぶかどうか、相当悩む。「先生のアイデアかもしれない」「先生が写真を撮ってきて『これ描け』って言うているかもしれない」「同じ絵が多量にあるかもしれない」「私の不勉強ではないか」……でも自分の解釈を信じて、でもたいていは「ええい、ままよ!」という気分で選ぶ。ともあれ、この作品を、この年の県展賞に選んだ。

後日、「子ども県展」で最終審査者が受賞者を対象にギャラリートークをするという企画があった。そのとき中学3年生の作者に会い、おお

むね私の解釈が妥当だったことがわかって安心した覚えがある。

さらに今回、この企画で大学生になった作者と再度会って、じっくり話をすることもできた(※2)。以下は、そのときに本人が語った内容である。

この絵は、夏休みの宿題だったんです。好きな風景を選んで描いて提出しないといけなかったので、デジカメを持って、町内を自転車で駆け回りました。土手や家など100枚近く撮りました。そろそろ陽が傾いたし帰ろうかなというとき、家の近くを走っていたら、「あっ、影が描ける」と思い、自転車をこぎながら何枚か撮りました。タイヤの下が切れているのはそのせいです。この場所は通学路ではないけれど、小さい頃から何回も何回も通っている場所です。

影を灰色や群青色で描いたのは、先生が『世の中に黒という色はない』と言っていたのを思い出したからです。道路はざらざらしているので、ベタ塗りにはしませんでした。でも水彩絵の具の使い方は苦手だから雑になっています。

その後、先生が県展に出す絵に選んでくれ、『田んぼは、もっと葉っぱの感じを出したら』などのアドバイスもしてくれました。それで、田んぼの表面の部分を描きこんだり、雲の感じやビニルハウスの表面の光っている部分を描いたりしました。

道は家の近所だが、通学の一場面ではなかった。県展に出すことを決めたのは先生で、そこから加筆している。田と道路の段差の部分の表現は苦労したようだ。両端から中央に向かって伸びる線はあぜ道ではなく、電柱の影だった。やはり絵から分か

私はこの絵を、次の1~4のように「描かれた事実」と「解釈」に分けて、見ていった。

1 事実 私はこのような絵を見たことがない。審査会場に類似の絵がない。
解釈 この作品の主題は子ども自身が決めたのではないか。先生の指図で描かれたものではないだろう。

2 事実 田の表現、田と道路との段差、筆の遣い方につたない部分がある。
解釈 筆遣いに慣れた美術部の作品ではないだろう。普通の生徒が授業の課題か夏休みの宿題かで描いたのではないか。

3 事実 影が大きく伸びている。影の向こう、画面右上に小さく山が見える。ビニルハウスもある。少し斜めになっていて、わずかに上部は曲線になっている。
解釈 影の伸びの比率が正確で(数学を思い出して!)、画面手前から山まで破綻がない。上部の曲線はカメラのあおりではないか。人間の目でとらえられない部分があり、また写真を分割して拡大したような鉛筆の跡もある。おそらく写真を撮ってそれを見て描いたのだろう。

4 事実 自転車の形がシンプルで、短パンのような服を着た影、その向こうに田が広がっている。
解釈 学校の授業で描けるような場所ではない。この子の住んでいる場所(米どころ山形!)だろう。作者は通学用の自転車に乗って毎日この道を通って、田が青くなったり、黄色くなったりする光景を見ているのだろう。そんなとき、何気なく道を見つめたら、自分と自転車の影が、道路から田まで伸びていた。それがおもしろくて、それを描こうと思った。つまりこの絵は「身近な風景からの発見」ではないだろうか。



「のびる影」
紙 水彩 38×54cm 『美術2・3上』P15に掲載

るのは1割、解釈の間違いも多い。でも、すてきな絵に出会えた。先生の適切な助言があることもわかった。縁があって本人と話もできた。何より、私の「引っかかり」の理由は、この生徒自身の「発見」だったことが確かめられた。この絵を描いてくれた子ども、選んでくれた先生、「子ども県展」、みんなに感謝である。

※1 作品の見方といっても1割もわかりはしないと私は考える。訳知り顔で分析したり、発達論や心理学をもっともらしくもち出したりしても、子どもの思いには届かない。子どもは大人もかなわぬくらい深いことを考えている。

※2 子どもは自分の絵を前にするとさっき描いたばかりのように細かく思い出して語ることができる。この絵も描いて4年経っていたが詳細に語ってくれた。記憶は、絵と人の中にあるのだろう。

奥村 高明
おくむら・たかあき
聖徳大学児童学部教授。
1958年宮崎県生まれ。
小・中学校教諭、美術館学芸員の後、
文部科学省教科調査官として
学習指導要領の作成に携わる。
専門は図画工作・美術教育、
鑑賞教育など。芸術学博士(筑波大学)。
『子どもの絵の見方～子どもの世界を
鑑賞するまなざし～』(東洋館出版社)、
『美術館活用術』(美術出版社)など、
著書多数。